



TITLE:

<批評・紹介> 白鳥庫吉著「塞外民族」

AUTHOR(S):

内田, 吟風

CITATION:

内田, 吟風. <批評・紹介> 白鳥庫吉著「塞外民族」. 東洋史研究 1937, 2(3): 275-276

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138726>

RIGHT:

塞外民族

白鳥庫吉著

本篇は頁僅かに五十六の小冊子であるが、然しこれぞ著者白鳥博士が、過去數十年に亘つて研鑽に研鑽を加へられた其成果の結晶に外ならない。誠に博士も其序文に述べられてゐる如く、支那史籍に現れた薰鬻匈奴以下の北方民族の人種判定の問題は、歐洲東洋學者が既に十八世紀の頃より之に手を染め、爾來種々雑多な解釋を生み而も猶幾多の難點を發見せざるを得ない底の、實に難事中の至難事である。博士はこれに對し「根本史料に基き種々の點より詳細に検討攷覈し」て得られたる大斷案を

茲に提示せられたことは、實に學界に於ける一つの大きな喜びである。本篇は本論を四部に別ち、第一に蒙古民族に屬すべきものとして匈奴・蠕蠕・拓跋・室韋・韃靼・塔塔・阻卜・蒙古を、第二に土耳古民族に屬すべきものとして獯狁・薰鬻・月氏・烏孫・高車・鐵勒・突厥・回鶻・黠戛斯を、第三に通古斯民族に屬すべきものとして肅慎・挹婁・勿吉・靺鞨・渤海・女眞・滿洲を、第四に蒙古と通古斯の雜種族として東胡・烏桓・鮮卑・庫莫・契丹・穢貊を擧げ、各其概史を附し且其人種區分の理由を概述せられた。勿論、此中、從來至難とされてゐる匈奴の人種問題（著者は本篇に單なる語の新解釋を發表されてゐる）の如きは、史乘殘存の數個の漢字寫音の匈奴語が土耳古語にても蒙古語にても解釋出來、而も廣大なる版圖内に數民族を包容してゐた匈奴の果して主民族（支配民族）のみの語が傳つてゐるのか否か、假に支配民族の言語としても、漢に流亡し來つた被治者民族の言語に訛られて傳へられる場合等（例へば土耳古語が蒙古語化されて傳へられる場合等）も考へられる以上、寧ろ當時乃至其近接時代の史家の觀察判定を特に重視しようとする立場のものには（是は拓跋氏の鮮卑非鮮卑説

に於ても同様)、尙多少の問題は残されるであらうが、斯様の事は既に著者も其序文に蓋し當然のことと言はれてゐる所であつて、本篇の價值は前にも述べた如く、この極めて困難なる問題に對し、博士が過去數十年偉大なる卓識と努力を以て克服し、其が成果を「烏孫に就ての考」「蒙古民族の起源」「東胡民族考」「周代の戎狄に就て」等々數十篇の論著として公にせられ學界をして全く之に傾倒せしめられたる體系ある一大斷案を、此の小篇に凝結せしめられ、此の問題の複雑さに從來昏迷し勝ちなる東洋史研究者に對し、依據歸趨する所を強く指し示されたる所に在つて、誠に今後此の五十六頁の小篇が學術の進展に寄與する所は、又測り難きまでに莫大なものある事を確信せざるを得ない次第である。(内 田 吟 風)